社会・空間システムの更新を超えて継承される地域づくりの普遍の「テーマ」の解読

大阪大学大学院工学研究科
地球総合工学専攻　教授

木　多　道　宏

1. 縮退・喪失の時代に都市・集落に継承すべきもの

現代は人口減少と大災害の時代である。過疎化による建物や土地の放棄、災害による街並みの破壊など、人々が築いてきた物理的な世界の「喪失」が進行している。

文化人類学者クリフォード･ギアツによれば､｢文化｣を存続・発展させることが人類の自明の原理である。「文化」とは「象徴に表現される概念が歴史的に受け継いでつくられるシステム」[1] であり、建築や都市はその｢象徴｣に当たるであろう。また､｢コンテクスチャリズム」の根底に影響を与えた詩人 T.S. エリオットの歴史観は「作家は過去を受容しながら、新しいもの（作品）をつくり、つくられたものは再び既成の全体のなかに入り込みながら、既成の伝統を造り変えていく」ことである [2]。既成の都市や地域に新たな構築物を付加することにより、地域の伝統の価値と未来を持続的に発展させていくことを意味するであろう。

しかし､｢象徴｣や「作品」としての構築物が縮退し、「文化」や「伝統」を未来へ向けて発展させるべき「創作」活動が制限される中、非物質的なもの、目に見えない何かに「文化」や「伝統」を見出し、発展させていくことが問われている。その考察を一歩進めるために､「地域文脈」という言葉の概念を再定義し､「地域文脈の継承」のあり方を示すことが重要であると考える。ここでいう「継承」とは、単なる継続を意味するものではなく、改善や発展的な変化の意味を含むものとする。

筆者はこれまで学生たちと、国内外の集落・都市・ニュータウンをフィールドワークしながら､「目に見えない」大切なものの継承事例を集めてきた。その時に鍵となった概念の一つは空間システムである。

2. 近代における空間システムの継承

「空間システム」とは何か。例えば、農家の屋敷における、門・母屋（おもや）・蔵・納屋・前栽（せんざい：観賞用の園庭）・ニワ（建物内外における作業用の空間）の配置は一定の関係で成り立っており、これは集落や村落全体における社会･空間の構成原理（全体性）と､個人や家族の個別の暮らしの原理（個別性）の双方から秩序づけられたものである。集落には、表通り・裏通り・裏山などの呼び方に象徴されるオモテ / ウラの関係、（ため池・水路など）水系の上流 / 下流や土地の高低に対応したカミ / シモの関係が存在し、これが敷地内の空間や建物の間取りの中に浸透する。前栽は敷地のカミ×オモテ、ニワはシモ×オモテに位置し、（母屋の）座敷は重要な客をもてなすために前栽の見えるカミ×オモテ側に、台所はニワに接続し、かつ客の動線から見えないシモ×ウラ側に配されるなど、配列の傾向性を見出すことができる。空間システムとは、部屋・建物・敷地・街区・路地・街路・地区・地域などスケールを越えて空間を組織化している「個と集合の関係」であると考える。

近代は建物の更新の時代であった。前近代にできた木造やレンガ造（時には組石造）の建物を、鉄やコンクリートの新たな構造体に建て替えていく。木造を鉄筋コンクリート造に建て替えたとしても、空間システムを継承することは可能である。むしろ、新たな時代に合った建物を、カミ・シモ、オモテ・ウラなどの関係に配慮して建てた集落は、近代を乗り越えて現代にも「生き生き」と生き続けている。

生きる都市もそれぞれの空間システムを有している。筆者らによる研究事例として、世界遺産に指定されているプラハの「歴史的市街地」を紹介する。第一の囲壁[注] の内側の最も古いエリアは、中世ゴシック期までに街区の基本骨格が形成された区域であり、観光客はゴシック期を基調とする景観に目を奪われる。一方、筆者らは外観ではなく、敷地や建物に形成される空間システムに着目した。中世から近世ルネサンス期に至るまでに､建物に増築や部分改築が繰り返され、元来の独立した中庭が敷地を越えてつながり、街区を

通り抜ける通路群（パサージュと呼ばれる）が形成されたと考えている（**写真1**）。一方、第一の囲壁のすぐ外側もゴシック期以降に骨格が形成された古いエリアであるが、こちらは19世紀末から20世紀初頭のわずか50年足らずの間に、敷地単位でほぼ全ての建物の建て替わりが進んだ。20世紀初頭に生まれたゼセッション様式による優れたモダンデザインの建物が目を引きがちであるが、さらに驚くべきは、全ての建物が建て替えられても街区内に敷地を越えて通り抜け通路が再編成されたことである（**写真2**）。通り抜け通路には街区を越えた連携もみられ、通路だけで街を便利に移動できる。街区の奥側は家賃が安く人通りもあるため、若い人々が新しい商売や事業にチャレンジすることもできた。

写真1　増築されても通路の連結は維持

写真2　建て替えにより再連結された通路

共産主義時代には国策により商店は閉鎖されたが、労働者の都心居住を推進するために街区内が学校・保育所・福祉施設などへ転用され、通り抜け通路はこれらへのアクセスに利用された。また、言論・思想の統制の中にあって、通り抜け通路に面するダンスホール・劇場・映画館が、「徹夜で席取りをするほど」の人気であり、当時の若者にとって都市の生活を豊かにする貴重な場所でもあった[3)]。共産主義体制が崩壊した後、街区内で修道院や王室に占有されていた庭園が市民に開放され、これに裏で隣接する建物の改築や改造によって通り抜け通路が再組織化されつつある（**図1**）。しかも、近年町中に膨大な観光客が溢れる中で、市民にとって貴重な憩いの空間となっている（**写真3**）。

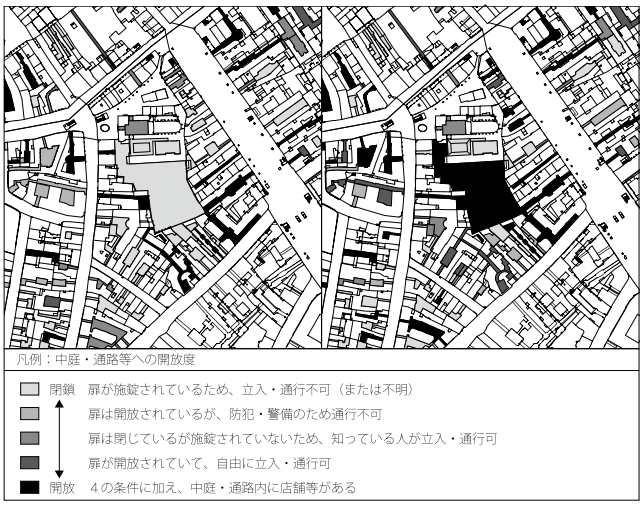

図1　修道院の庭園（街区中央）の開放後、通路群の開放度が向上

写真3　開放された修道院の庭園

プラハはオモテとウラの二重構造により、社会階層や都市機能の重層性を生み出し、伝統と革新の両立する文化と経済の中心であり続けてきた。その基底には、構法やデザインが変わっても、近世、近代、現代と各時代に応じた通り抜けの空間システムを発展させてきたことにあると捉えている。

集落や都市で育まれた空間システムは、「生き生き」とした暮らしを持続させるしくみを持っている。また、長く生き続ける集落や都市は、時代を超えて空間システムを発展・進化させてきたこともわかってきた。

最近では、東日本大震災で被災した宮城県女川町において、17の漁村集落の空間システムを調査した。**図2、3**は被災前の竹浦集落の社会組織の分布と住居の間取りである。一つの漁村は海の資源を分かち合う濃密な絆で結ばれた共同体である。ハマ・班という地縁的な社会組織の階層に、マゲといわれる血縁的なグループが折り重なり、相互扶助のしくみが形成されている。ヒヤリングを重ねていくうちに、この集落の空間の成り立ちの原点は歌で隣人や仲間を癒し、感動させることにあると気づいた。**図3**は民家の間取りと行事における人の位置を示している。盆には「梅歌講（ばいかこう）」と呼ばれる歌いの慣習があり、複数の女性が縁側越しに仏壇に向かって歌う。また、嫁いで

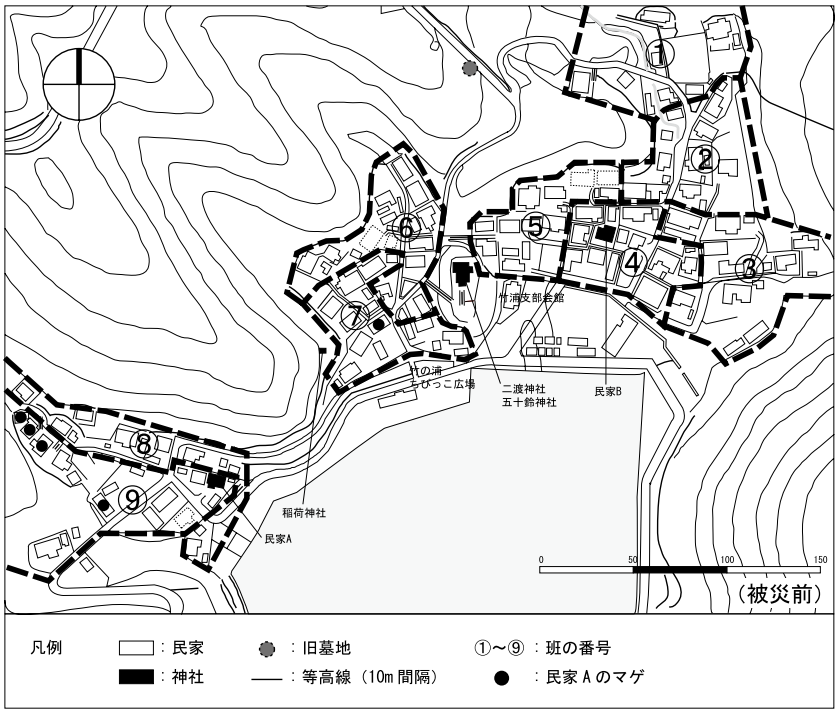

図２　女川町竹浦集落の社会空間（被災前）

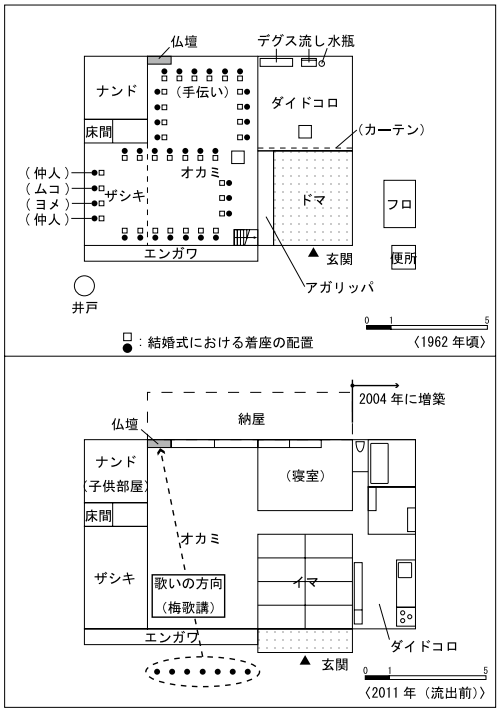

図３　記憶から起こした民家Ｂの平面図

きた新婦が家に入るとき、隣人や親戚が歌を歌い出迎えてくれた「サプライズ」の体験が貴重な思い出となっている。

この集落は高所移転を決めている。小さな社会組織のまとまりを生み出す街区設計、歌いの慣習を継続するための間取りの形式など、これらの空間システムを新たな住宅地へどのように移行するかが問われている。

3. 現代に喪失する空間システムと社会システム

前述した空間システムの発展は、そこに暮らす人々による創意工夫から実現されるものであった。しかし、縮退と大災害の現代は空間システムのみならず、人・社会とそれらが織りなす社会システムも同時に失われてしまう時代である。一体何を、どのような方法で継承すればよいのだろうか。

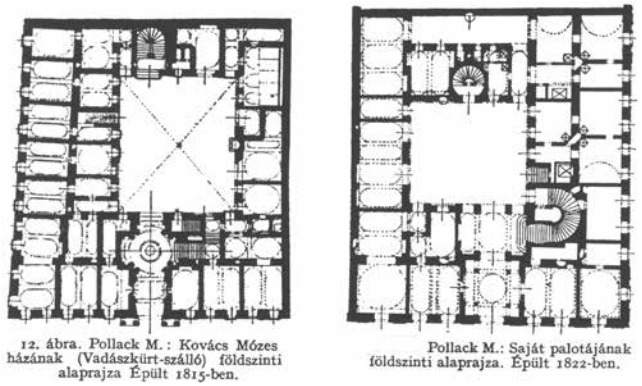

図４　建築家ポラック .M の設計によるハンガリー建築の集大成（19 世紀前半）
角地にあるため、2 辺の平面が広い

ブダペストのユダヤ人旧ゲットー地区がこの問いにヒントを与えることがわかった。ここは旧囲壁[注)]のすぐ外側に隣接する歴史的市街地であり、19 世紀前半に市街地が形成された地域である。当初はハンガリーに典型的な中庭型の建築が建ち並んだ。通り側に広い間取り、中庭を挟んだ奥側に狭隘な平面形式。高所得の世帯が表に住み、装飾の美しいバルコニーのある 2 階が建物のオーナーの住まいとなった。一方、奥側の狭隘なブロックには低所得者層や召使が住んだ（**図 4**）。オーナーや富裕層は表側の豪華な階段を利用し、召使たちは奥側の質素で小さな階段を使った。

しかし、筆者らの調査によれば、19 世紀後半から奥側の狭隘部が撤去され、あるいは工房に改築されるなどの変化が見られるようになる（**写真 4**）。その時期はユダヤ人がこの地域に定着し始めた年代である。ユダヤ人はハンガリー人と同様に召使を雇ったが、家族同様に同じ住戸の部屋を与え一緒に食卓を囲んだ。「召使」はクリスチャンの女子学生である。ユダヤ人にとって金曜日の日没から土曜日の午後までが安息日であり、「労働」をすることができない。燭台に火を入れること、食材を買い出しにいくこと、料理をすることさえ「労働」と見なされるため、異教徒の手助けが必要であった。「召使」はここから大学に通い、都会で最先端の勉学に勤しみ、また、貧しい田舎の家に送金し実家の家計を助けることもできた。つまり、家

写真４　敷地奥側が撤去・改変された建物

族同然の「召使」に敷地奥の狭隘部は不要になったということだ。

また、シナゴーグ（ユダヤ人の教会）のある街区では、建物の奥側が改造され、敷地にまたがって通路が確保された。コミュニティを大切にするために、安息日には一定の距離以上は出かけられない慣習があり、街区内の通路は近道となった。また、宗教的な差別を避け、街区内で安全に暮らすためにも通路は必要であった。街区内には学校・託児所・福祉施設などが設けられた。

近世から近代にかけた時代は、街を形成する主役がハンガリー人（近世）からユダヤ人（近代）へと入れ替わる転換期であった。また、空間システムも、敷地で閉じた構成から街区内で連携する構成へと更新された（**図５、６**）。しかし、異なる立場の人々が、街区内できめ細やかに「共生」するというテーマは両時代に共通のものだ。

ハンガリー人に構築され、ユダヤ人により改造された地域は、ナチスの戦時体制の下、ユダヤ人のゲットー地区として壁で囲い込まれ、連行や虐殺も行われた。続く共産主義体制下ではゲットー地区を解除されたが、ユダヤ人の人口は激減してしまった。この地区は、中世に成立した旧市街地（世界遺産）に隣接していることから、地元行政の強力な開発志向も手伝って、海外の大資本やディベロッパーがホテルや高級アパートメントを開発しようと土地を買いあさっているところである。開発が先行する街区では、従来の建物が空間システムごと除却され、社会階層や宗教を越えた「共生」が消失しようとしている。

4. 地域づくりの普遍のテーマの解読と継承

ユダヤ人による「共生」の歴史的事実は、宗教観の

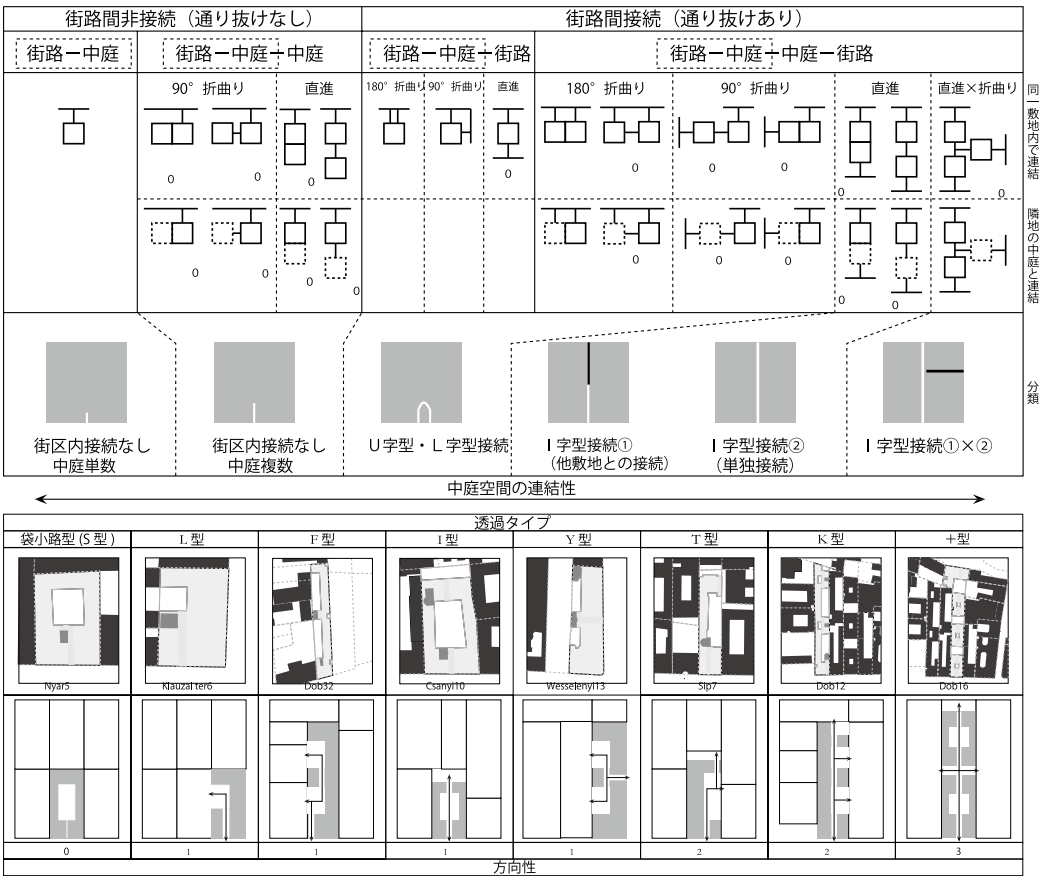

図５　旧ゲットー地区の建物群における中庭・通路・階段の連結形態の類型

違いも手伝って、人々の関心を引くものではなかった。また、ナチスによる虐殺は都市史を語る上で、積極的には取り上げられないものだ。しかし、ブダペストのどの地区にも先駆けて、先進的な「共生」の社会システムと空間システムを生み出したことを再認識すれば、違った将来ビジョンが見えてくる。社会構造を単一化する再開発も、ジプシーが住み着き倒壊寸前になっている建物を頑なに残そうとする保存グループも、「共生」という普遍のテーマに気づいていない。過去の再評価によって将来ビジョンも変わり、将来ビジョンの立て方により過去の価値が再生される。この地域の現代とは、これまで積み上げられた空間システムを生かし、開発・保存の対立を越えた、新たな都市デザインの可能性をも検討する時代であろう。

筆者らが現在取り組んでいることは、近世・近代に共通する普遍のテーマを解読し、現代に翻訳するということである。さらに、地域の人々や大学とワークショップを行い、普遍のテーマの下に、過去から未来へと続く創意工夫の物語を発見し、それを紡ぐための建築・都市・集落のデザインを提案することである。

筆者らの定義する「地域文脈」とは、地域の人々が無意識・意識的に過去と未来の人々と地域づくりのテーマを共有し、過去からの知恵の蓄積と現代の創意工夫によってつむぎあげる発展的な連鎖の「物語」である。また、空間システムやその痕跡には過去の地域の人々の創意工夫と知恵が刻み込まれており、これを再評価することで、より良いストーリーに書き換えていくことが現代の人々とプランナーの役割であるということが筆者らの提案であり、実践である。

＜参考文献＞
1）クリフォード・ギアツ著、小泉潤二訳：解釈人類学と反＝反相対主義、みすず書房、2002
2）秋元馨：現代建築のコンテクスチュアリズム入門、彰国社、2002
3）木多道宏：プラハの都市形成における地域文脈の継承に関する研究　歴史的市街地における街区内空隙の「開放性」の類型と変容特性について、日本建築学会計画系論文集、第679号、pp.2063-2072、2012.9
注）囲壁は都市の防衛のために都市周囲に構築されたものであり、プラハの歴史的市街地は旧市街STARÉ MĚSTO（第一の囲壁内側）と14世紀に開発された新市街NOVÉ MĚSTO（第一の囲壁と第二の囲壁の間）からなる。

（建築　昭和63年卒　平成2年修士）

図6　旧ゲットー地区における敷地内の中庭・通路・階段の分布